

鋤崎古墳群 3

B-5号墳の調査



2001

福岡市教育委員会



墳丘遺存面全景（東から）



石製階段（S X103）と周辺遺物出土状況（東から）
※階段は掘り下げ途中

序

福岡市西区にある鋤崎古墳は全長62mの前方後円墳で、初期の横穴式石室を持つことで有名ですが、今年5月に国指定史跡の答申を受けました。この鋤崎古墳の周囲には多くの円墳群があり、その内の一部は1987~95年に調査し、多くの成果を得ました。今回報告する古墳はこの時の調査に続くもので、鋤崎古墳の東側に位置する円墳です。古墳時代終わり頃に位置する小さな古墳ですが、古墳の入り口から続く墓道は長さ30mに及び、その先端には石製の階段を有するという、全国的にも希有な古墳です。調査の実施及び報告書の作成にあたりましては、西部ガス興商株式会社の多大なご協力を得ました。お礼を申し上げますとともに、本書が研究資料として活用され、また埋蔵文化財保護の一助となれば幸いです。

平成13年12月27日

福岡市教育委員会

教育長 生 田 征 生

例　　言

- 1 本書は、西部ガスのガスタンク造成工事に伴って平成11年度に調査を実施した鋤崎B-5号墳の調査報告書である。
- 2 鋤崎古墳群B群にはこれまで4基の古墳があり、当古墳はそのいずれにも該当しなかったため、B-5号墳の名称を付した。ただし、現地では1~4号墳のいずれも確認することはできなかった。詳細は、「2 調査に至る経緯と調査の経過」に述べたとおりである。
- 3 本書に掲載した遺構の実測は調査担当者である米倉秀紀・藤富士寛が行った。
- 4 本書に掲載した遺構及び遺物の写真撮影・遺物の実測・製図は米倉が行った。
- 5 鉄滓の分析にあたっては本市の長屋伸の協力を得た。
- 6 本書の編集・執筆は米倉が行った。

調査番号	遺跡略号	調査地地番	申請面積	調査面積	申請者	調査期間
9926	SKK-B-5	西区大字今宿青木字鋤崎421他	45,313m ² の内	290m ²	西部ガス興商 株式会社	990621 ~ 990729

本文目次

1 古墳の位置と既往の調査	1
2 調査に至る経緯と調査の経過	2
(1) 調査に至る経緯と調査組織	2
(2) 調査の経過	2
3 調査の記録	3
(1) 古墳の現況	3
(2) 墳丘	3
(3) 主体部	5
(4) 閉塞	7
(5) 墓道	7
(6) 石蓋土壙墓	11
(7) 山上遺物	12
4 まとめ	17

挿図目次

図1 古墳位置図	1
図2 古墳周辺現況測量図	2
図3 古墳現況測量図	3
図4 地山整形図	4
図5 墳丘遺存測量図	4
図6 墳丘土層断面図	5
図7 横穴式石室	6
図8 閉塞石	7
図9 墓道平坦面土層断面	8
図10 墓道1石製階段	9
図11 墓道1・3遺物出土状況	10
図12 石蓋土壙墓	11
図13 出土遺物1(墳丘・石室)	12
図14 山上遺物2(墓道1土器群A)	14
図15 出土遺物3(墓道1その他)	15
図16 出土遺物4(墓道3)	16
図17 遺構別出土須恵器	18
図18 鋸崎B-5号墳類似石室	19

表目次

表1 出土鉄津一覧表	17
------------	----

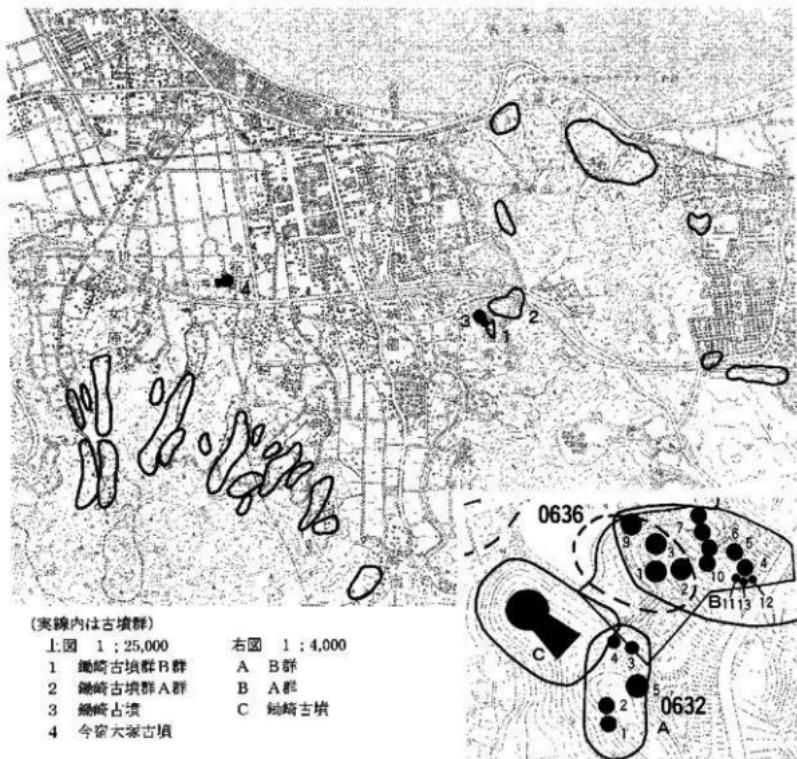
図版目次

卷頭 上 墳丘遺存面全景	
下 石製階段と周辺遺物出土状況	
図版1 現況及び墳丘	
図版2 横穴式石室	
図版3 横穴式石室入口及び墓道1	
図版4 墓道1・3及び石蓋土壙墓	
図版5 出土遺物1	
図版6 出土遺物2	
図版7 出土遺物3	
図版8 出土遺物4	

1 古墳の位置と既往の調査

福岡市の西部には早良平野と糸島平野があるが、その間は叶岳・長垂山の山岳丘陵によって阻まれている。鋤崎古墳群はこの丘陵から西北に派生した、糸島平野側の尾根上に立地する。糸島平野東部には南から伸びる山岳丘陵先端部に連なるように古墳が築かれ、その数は300基を超える。鋤崎古墳群はその東端にある。ただし鋤崎古墳群周辺は古墳数が少なく、北側500m内に油坂古墳群3基があるだけである。鋤崎古墳群は北側尾根に乗るA群と、南側尾根に乗るB群に分かれる。B-5号墳が乗る丘陵は頂部の幅が狭く、古墳は頂部から北東にやや降りた斜面上にある。古墳下は急な斜面の谷で、谷底との比高差約9mを測る。この丘陵の先端部には前方後円墳である鋤崎古墳が築かれている。

鋤崎古墳群は、鋤崎古墳も含めて4度の調査が行われており、いずれの調査も報告書もしくは概報が出版されている。鋤崎古墳は1981年～83年に調査が行われた。成果は周知のとおり最古式と目される横穴式石室と鏡群を含む多様な副葬品が出土した。鋤崎古墳北側に広がる鋤崎古墳群A群の調査が1987年（鋤崎古墳群A群第1次）、1989年（同2次）・94～95年（同3次）に行われた。古墳群は6世紀前半から7世紀までの多様な石室を持つ古墳群が発見され、環頭大刀などの遺物が出土した。また7世紀後半以降の横口式炭窯や製鉄炉も検出されている。



2 調査に至る経緯と調査の経過

(1) 調査に至る経緯と調査組織

平成9年2月26日付けで、西部ガス興商株式会社から、福岡市長あてに福岡市西区大字今宿青木字鋤崎121番における開発計画事前審査願が提出された。この開発は先に行なった鋤崎古墳群A群の調査と一連の開発である。計画区域には未調査の古墳が1基あることが確認されており、最終的には西部ガス興商と平成11年度に調査することで合意した。調査前には古墳周辺に部分的な試掘を行い、古墳以外の遺構が存在する可能性が低いことから、発掘調査は古墳1基とその周囲約500m²を対象に、平成11年6月21日から7月29日に行った。調査組織は下記のとおりである。

調査 平成11年度 整理・報告 平成13年度

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課調査第1係

課長 山崎純男 係長 山口謙治 調査担当 米倉秀紀 蔵富士寛

調査庶務 文化財部文化財整備課管理係

(2) 調査の経過

調査は平成11年6月21日に現況測量から開始した。その後、墳丘にトレーナーを入れ、ベルトを残して墳丘遺存面を検出した。あわせて、古墳の下は標高差約10mの急斜面であることから、古墳下については重機で表土剥ぎを行い、危険防止のため早い段階に転落防止用の土の段を作った。墳丘遺存面調査後は地山面の検出を行って石室全体を露出させる予定であったが、後述のように石室は歪んでおり、危険を避けるため石室掘方掘削は断念した。当初は古墳周囲のみの表土を剥いだが、墓道が南に向かって伸びたため2度に渡って南側に調査区を拡張した。調査は7月29日に無事終了した。

なお、B群は福岡市分布地図改訂版では1~4号の4基からなるが、当古墳はそのいずれにも該当せず、新発見の古墳と考えられるため、5号墳の名称を付した。調査中に他の古墳の確認を数度行ったが、1・2号墳は深いブッシュのため確認することができず、3・4号墳周囲は草が生い茂っていないにも関わらずこの2基を見つけられなかった。結果的にはこの2基は古墳ではなかったか、あるいは改訂版の分布地図に位置を間違えて記載したものと考えられる。ただし、古墳名称に混乱をきたす恐れがあることから、名称についてはそのまま残し、今回発見の古墳名称をB-5号墳とした。

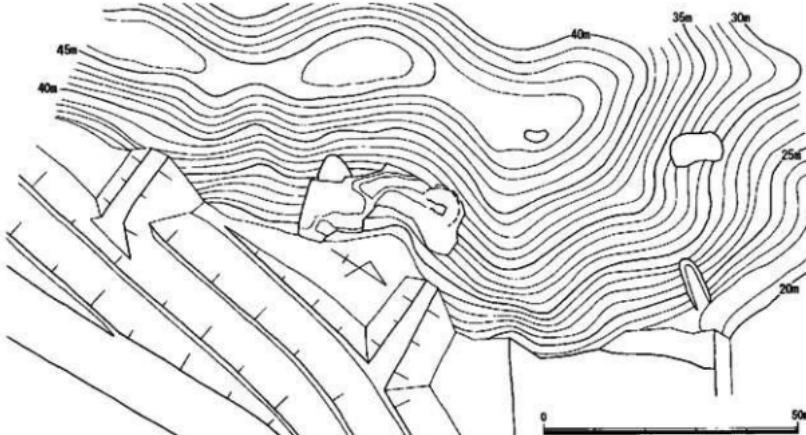


図2 古墳周辺現況測量図 (1/1,000)

3 調査の記録

(1) 古墳の現況 (図2・3)

古墳は東に傾斜する急な斜面の上部に位置しているためか、墳丘下側を大きく流出しており、概ね半分強の墳丘が遺存しているのみである。斜面上側の墳丘西半は逆に上部及び墳丘からの流土で埋もれており、馬蹄形状の周溝は判然としない。全体としてわずかに盛り上がりが確認できる程度であり、石室が見えなければ、現状で古墳と判定するのは難しい。石室は斜面の軸と垂直に、等高線に沿って南側に入口を持ち、すでに開口している。葬道部東壁はすぐではない。玄室は完存しているものの、上部が歪み、天井部が奥壁側で20cm以上落ちており、危険な状態である。石室内には土が厚く堆積していた。

(2) 墳丘 (図4～6)

上述のように墳丘の残りは悪く、頂部の一部と東側墳丘はほとんど残っていない。墳丘が残存する北側と西側(尾根頂部側)に2本のトレンチを入れ、その結果に基づいて墳丘遺存面まで掘り下げた。さらに盛土を撤去し、石室掘方も下げる予定であったが、前述のように右室が危険な状態であったため、石室掘方の底までの掘り下げは断念した。石室中心から裾部までの距離は、西側(尾根側)が3.9m、北側が3.5mで、復元すると7～8m前後の円墳となる。尾根頂部側は地山を馬蹄形状に削って周溝を作っている。周溝の底の幅は30～50cmである。現存する盛土は少なく、最も残りの良い北側で地山面からの高さは50cmほどである。残存する盛土内にも多くの樹根が入っており、版築の状況はあまり良くないが、北側墳丘では1枚の厚さが10cm前後の版築を施している。周溝内には上(西)方から多くの土が流入し、その中には白磁や縄文土器などが入っている。盛土の多くが流れているためか、墳丘及び周溝から出土した古墳時代遺物は少ない。

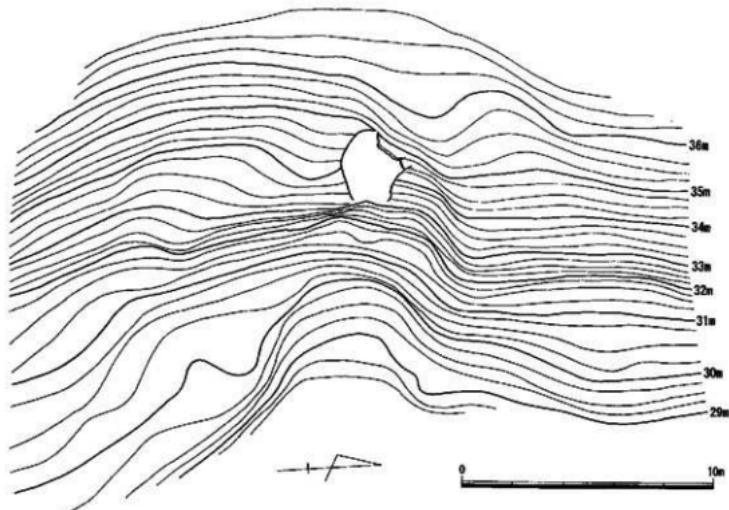


図3 古墳現況測量図 (1/200)

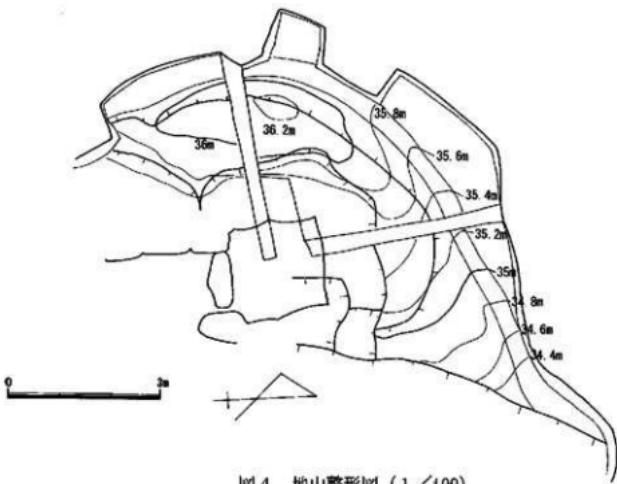


図4 地山整形図 (1/100)

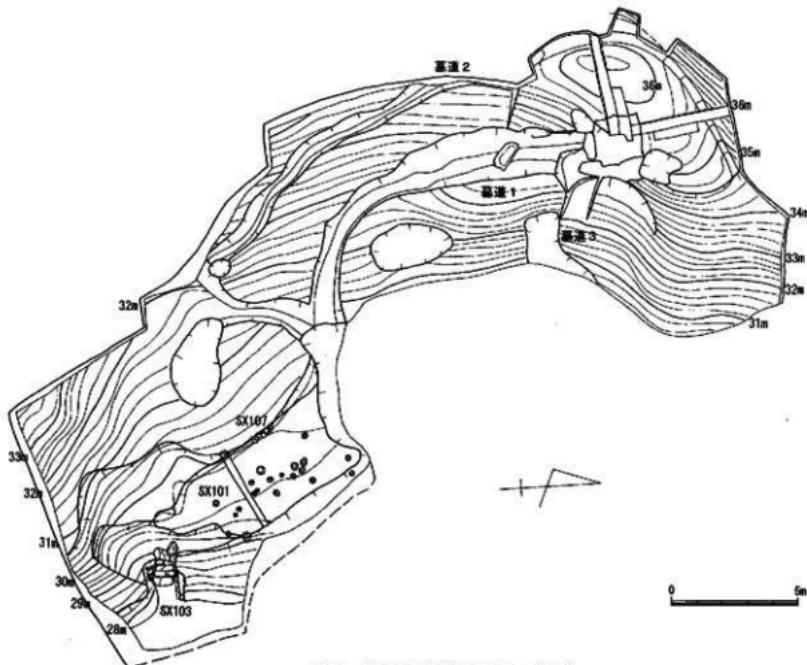
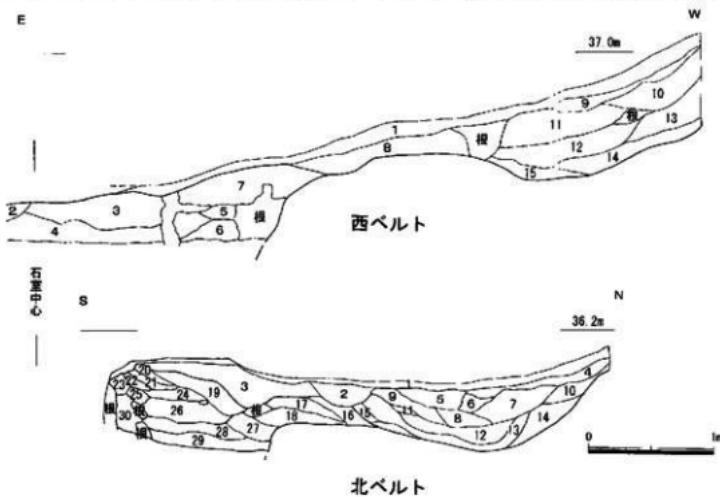


図5 塗丘遺存測量図 (1/200)

(3) 主体部(図7)

埋葬主体は斜面軸と直交に、南に開口する单室両袖の横穴式石室である。玄室左(西)側壁長1.66m、右(東)側壁長1.7m、奥壁長1.74m、前壁長1.82mで、ほぼ正方形のプランである。天井右までの高さ1.55~1.73mを測るが、天井石は西側が20cm以上落ちており、本来の高さは2m近い。石材はすべて花崗岩である。西壁は高さ70~80cmの大きな腰石2枚の上に中小の石を挟んで1~2段の高さ40~50cmの石を配する。縦・横ともに目地は通っていない。各石の大きさに差はあるものの、右壁も同様な積み方である。奥壁は高さ1m前後の大きな腰石1枚から成り、その上に大小の石を積むが、やはり目地が通らない。奥壁腰石最上部から、両側壁との間に力石を配している。両袖石は高さ90cm前後、幅80cm前後の大きなものを使っている。楣石はなく、玄門部の上はそのまま天井石である。天井石は玄室からそのままやや下りながら羨道部へと続いている。玄門部には高さ30cm、幅50cmの大



西ベルト 土層名称	北ベルト 土層名称
1 支土(腐葉土)	1 表土(腐葉土)
2 明黄褐色土	2 にぶい橙色土(砂粒多い、根多い)
3 黄褐色土(樹根により軟化)	3 浅黄褐色土(砂粒多い、根多い)
4 黄色土	4 明黄褐色土(砂粒多い、根多い)
5 浅黄褐色土	5 4に同じ
6 橙色土(花崗岩風化土)ま じり明黄褐色土	6 にぶい黄褐色土
7 黄褐色土	7 明黄褐色土
8 明黄褐色土	8 黄褐色土
9 褐色土(極めて根多い)	9 にぶい黄褐色土
10 明黄褐色土	10 にぶい黄褐色土
11 明黄褐色土(軟質)	11 棕色土
12 黑色土	12 黒色土
13 褐色土	13 黑褐色土
14 にぶい黄褐色土	14 黄褐色土
15 黄色土	15 にぶい黄色土
	16 黄色土(硬い、砂粒多い)
	17 明黄褐色土(硬い、砂粒多い)
	18 黄褐色土(硬い、砂粒多い)
	19 黄褐色土
	20 浅黄褐色土
	21 明黄褐色土
	22 明黄褐色土
	23 黄褐色土(根による汚染)
	24 浅黄褐色土
	25 明黄褐色土
	26 明黄褐色土
	27 棕色土
	28 26-27
	29 28層よりやや黄色い
	30 淡黄褐色土

図6 墳丘土層断面図 (1/40)

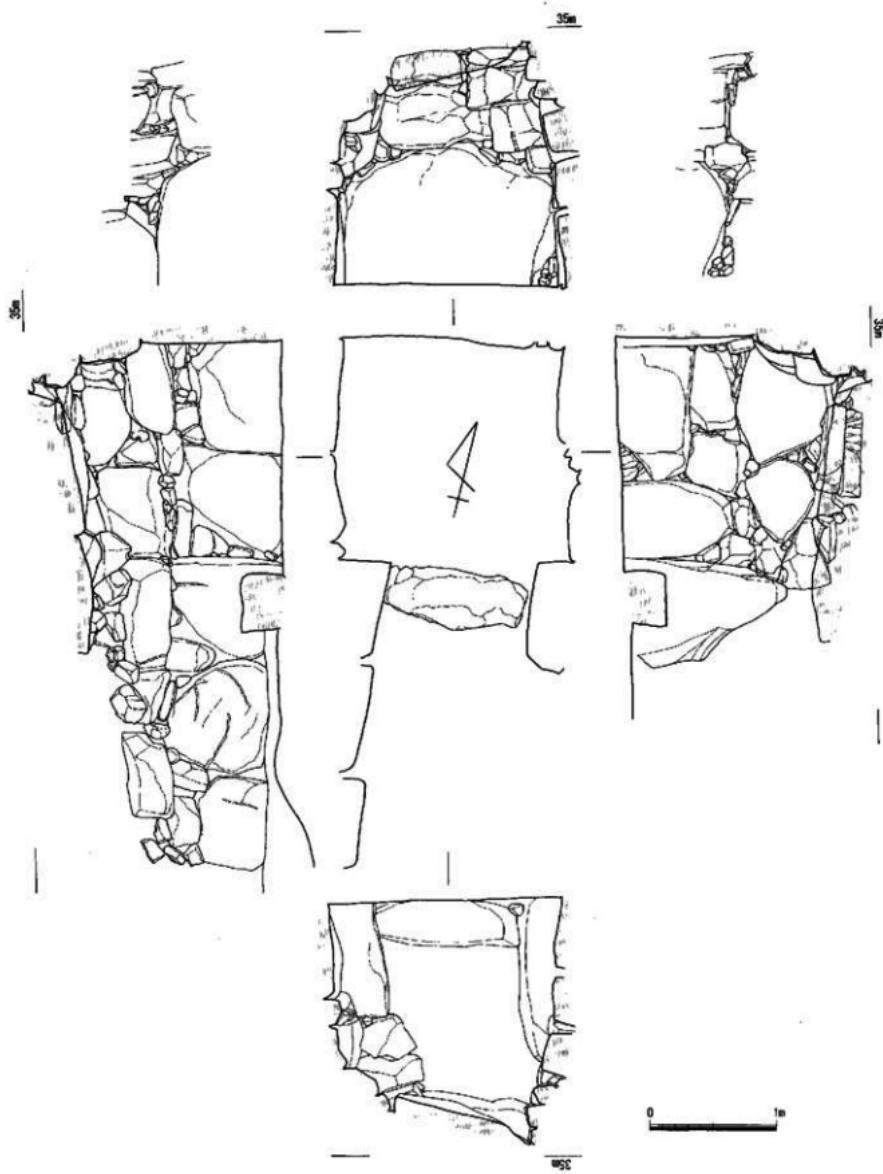


図7 横穴式石室 (1/40)

きめの仕切石がある。羨道壁は右壁をすべて破壊されているが、これは後述するように最終追葬時までは破壊されている。羨道部左壁は高さ60~90cmの大きな腰石の上にかなり乱雑に石を積み、袖石からそのまま続くように壁を作っている。両袖石間の幅約1.2mを測る。西壁長は2.5mを測り、玄室長より少し長い。また羨道部の床面は玄室より5cmほど高い。仕切石からの距離約1.2m地点で床面は下降し、墓道へと移行している。羨道部には閉塞石が積まれている。

遺物の出土状況

玄室・羨道部には30~50cmの土が堆積していた。床面はさほど破壊されてはいないものの、すでに荒らされていると思われ、玄室からは小破片の須恵器・十師器しか出土しなかった。羨道部では、流れた閉塞石の下の仕切石すぐ近くから、鐵鏃3点とガラス勾玉1点が出土した。すべて床面上からの出土である。鐵鏃は比較的原位置に近いと考えられる。

(4) 閉塞(図8)

石室の閉塞は羨道部で行っている。仕切石から約40cm地点から1.4m地点の間に石を積んでおり、その両側には積石の一部が落ちている。石は長さ20~30cm、厚さ10~20cmの石が多い。面を成していない部分はないが、もっとも玄室よりの部分のみはやや大きめの角礫で構成している。閉塞石中には鐵鏃や須恵器片が入っており、現存する閉塞は追葬時のものであると考えられる。閉塞の北東側は大きく欠けている。これは後述する墓道3を掘削した際に破壊したためである。墓道3は最終追葬時のものと思われ、従って追葬は2回以上行われたと考えられる。

(5) 墓道

墓道は3本検出した。墓道1は羨道部からそのまま続くもので、南に伸びている。墓道2は墓道1から途中で枝分かれをし、墓道1の西側の高い地点を墓道1と併行して走る。墓道3は前述のように羨道部東壁と閉塞石を破壊して、石室から直に下(東)に降りる。

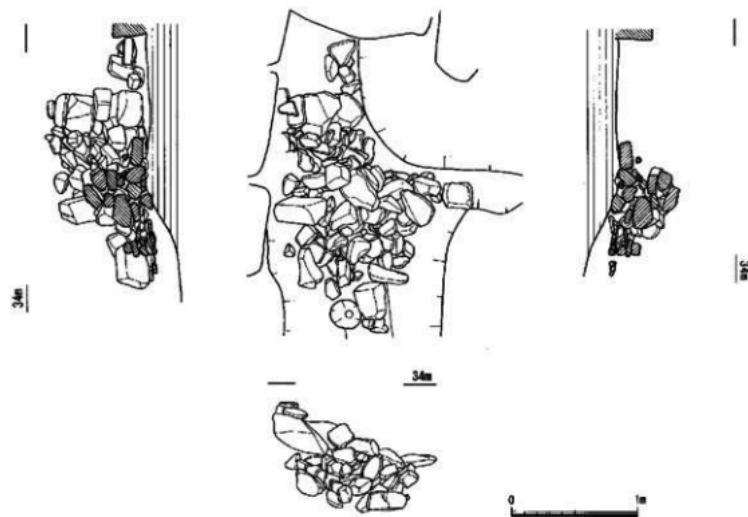


図8 閉塞石(1/40)

① 墓道1 (図9)

石室からそのまま続く墓道である。長さ7mほどまっすぐ南に向かった後、斜面を一端降り、平坦面にいたる。平坦面に至るまでは断面逆台形を呈する溝である。もっとも幅の広い墓道部付近で、幅2.1m、深さ1m前後を測り、平坦面近くでは幅1.2m、深さ10cmを測る。平坦面と溝の結合点付近は崩落している。平坦面は南北に長く、長さ約8m、幅約3mを測り、ピット群が検出された。その後、再び下(東)に降りて、谷底に至る。その総延長27m前後に及ぶ。最後の谷底に降りる部分には石製の階段が敷設されている。墓道1内には随所に多くの遺物が配されており、それぞれ遺物が出土した場所にSX101から105の番号を振って取り上げた。101は平坦面西側、102は階段の下帯、104は階段部分、105は平坦面中程から北側である。当初墓道1の溝が墓道2との結合点より南に伸びるとは思わなかつたため、順次番号を振ったが、結果的には番号が重なる結果となつた。改めて造構番号を整理すると、SX101=欠番、階段下はSX102、階段はSX103、SX104=欠番、平坦面はSX105、階段上はSX106とする。SX101の遺物はSX105、SX104の遺物はSX103に含まれる。また墓道部に隣接する部分は土器群Aの名称を付けた。以下、造構の状況と合わせて詳述する。

平坦面 SX105

墓道の途中にある長さ約8m、幅約3mの平坦面である。平坦面には全部で20基のピットが存在するが、規則的配列は看守できない。平坦面の東側崖面近くに3ヶ所に焼土がある。焼土は径10~20cm、厚さ数cmほどの小さなものである。西側端は高さ約30cmの直に立つ壁を削りだしている。この壁に沿つて石蓋土壙墓が構築されている。遺物は各所の埋上巾から点々と出土したが、床面直上の遺物は少ない。平坦面の最北部、崖線近くでは土器師壇・土器師小臺の2点の略完形品が出土し、土器群2の名称を付した。また埋土の掘り下げ中に埋土上部から須恵器环身1点、下部からは器1点、高环1個体以上、环蓋1点などが出土した。

階段 SX103 (図10)

平坦面の南端から谷底に降りる部分に敷設されている。5段から成り、もっとも上の段は平坦面側(北側)にずれて置かれ、平坦面へと上るように敷設されている。すべて花崗岩製である。下3段は直方体に整形され、地山を掘りこんだ後、差し込んでいる。下から2・3段目は上部と下部が割れて離れており、3段目の上部は調査中に転落してしまった。1~3段の石の下部はほとんど隙間もないほど丁寧に作られ、まったく微動だにしなかつた。4・5段目は自然石の状態に近いが、平坦な石材を運んで据えている。4段目までまっすぐ上に上ってきた後、5段目は向かって右(北)に作られ、平坦面 SX105へとつながる。階段部分は全体が幅約1.5mの溝状に掘られており、壁面の高さは北側が約40cm、南側が約60cmを測る。

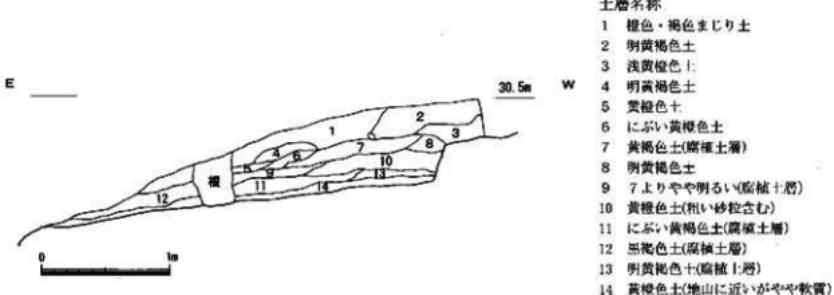


図9 墓道平坦面土層断面 (1/40)

以上を勘案すれば、まず斜面軸方向を大きく溝状に掘った後、下から石材を埋め込む穴を掘り、下から順に石材を埋設したと考えられる。階段埋土から若干の混入遺物が出土した。また階段の上（SX106）と下（SX102）では遺物がまとまって出土した。

SX106

階段の最上部より60cmほど上の小さな平坦面で、炭のまとまりと土器群があった。炭は30cm四方内に大きな炭1つと細片が散乱する状態で出土した。炭の南側の平坦面端で土師器の壺の破片がまとまって出土したが、完形品にはならない。

SX102

階段下の平坦面上で検出した土器群。階段直下の北壁より約1m北側で出土し、ここから先の墓道は谷底近くを北側へ、すなわち以前調査を行ったA群の方に伸びていると考えるのが妥当であろう。出土した土器は、略完成形の須恵器壺1点の他はすべて破片である。

土器群A（図11）

閉塞石南側の渡道入口に接する場所で検出した。墓道床面から約30cmの高さに黒色を呈する腐植土層があるが、遺物の大半はこの腐植土層最下部から出土した。変わったヘラ書き文様のある須恵器壺（27）や「××△」のヘラ記号を有する須恵器壺（26）などが出土しているが、27の土器のみ略完成形で他は破片である。腐植土層の下の墓道最下部近くや、逆に埋土の上部からも須恵器の破片が出土している。腐植土層下部から出土した大半の一群は、墓道を掘削した後、底近くが埋もれた後に遺棄したか、流れ込んだものである。また最上部では滑石製の異形勾爪が出土した。土器の大半が出土したの

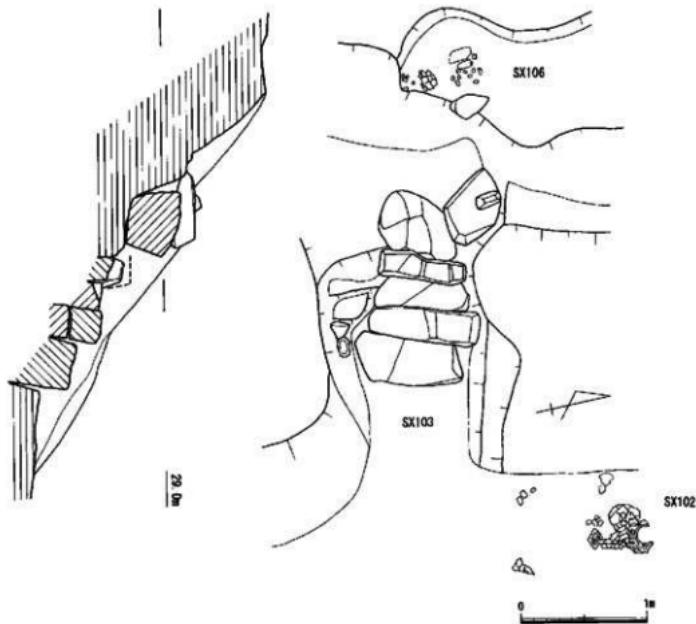


図10 墓道1 石製階段 (1/40)

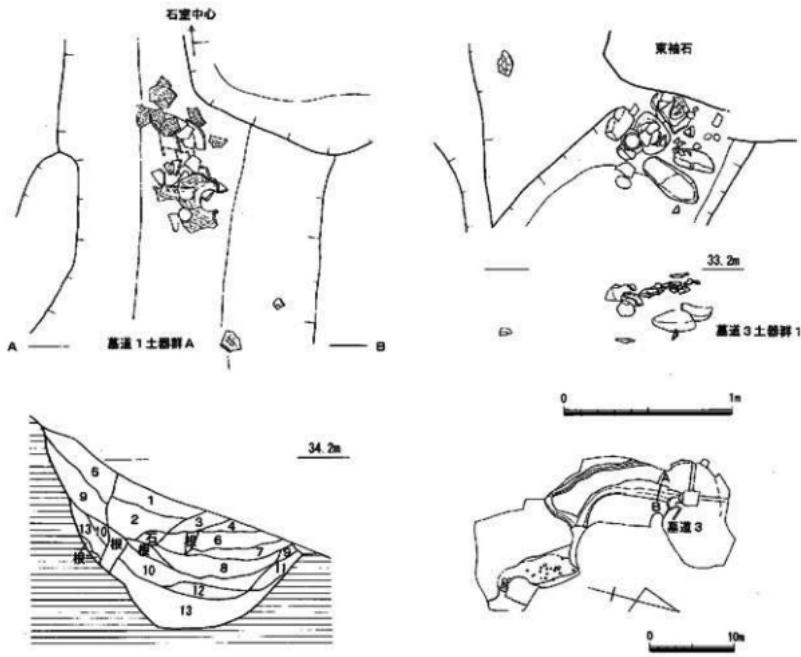
が腐植土層の下部（12層）であることと、ほとんどが破片であること、完形に近い壺もその場に埋置したとは考えられないことから、墓道の底近くが埋もれた後の転落遺物、もしくは搔き出し遺物と考えられる。10・12層の腐植土層より下の土器は、墓道が埋もれる過程で混入した遺物であろう。

② 墓道 2

墓道 1 の平坦面上部から枝分かれしている。墓道 1 との切り合いはわからなかった。枝分かれした後 5 m ほど南下し、さらに折り返すように北西側に U ターンして、墓道 1 の西側上部を並行して走っている。その延長は調査区外にあるため不明であるが、このまま伸びれば当古墳の西側周溝につながる。当墳の西側には尾根を挟んで B-2 号墳があるが、尾根頂を挟んだ反対側斜面まで墓道が延びるかはやや疑問である。あるいは当古墳の上に別の古墳があるかもしれない。墓道 2 の溝幅 50~90cm、深さ 10~30cm を測る。遺物は須恵器片が少量出土しただけである。

③ 墓道 3

前述のように石室からそのまま下に下る墓道である。渋道部東壁と閉塞石を破壊しているが、閉塞石は明らかにこの墓道掘削時に破壊したと考えられるが、渋道壁については、自然に崩れた後に掘削



A・B 土器層名

- | | | |
|------------|------------------|------------------|
| 1 桂色・褐色より上 | 6 にぶい黄褐色土 | 11 にぶい黄褐色土（腐植土層） |
| 2 明黄褐色土 | 7 黄褐色土（腐植土層） | 12 黒褐色土（腐植土層） |
| 3 淡黄褐色土 | 8 黄褐色土 | 13 明黄褐色土（腐植土層） |
| 4 明黄褐色土 | 9 7よりやや明るい（腐植土層） | |
| 5 黄褐色土 | 10 黄褐色土（粗い砂粒含む） | |

11 にぶい黄褐色土（腐植土層）

12 黒褐色土（腐植土層）

13 明黄褐色土（腐植土層）

図11 墓道 1・3 遺物出土状況 (1/30)

したか、掘削時に破壊したか不明である。最終的には閉塞していない可能性が高い。墓道は全体に浅い溝状を呈するように掘り下げている。特に墳丘部分は垂直近くに削り出している。墓道の床面はやや不明確ではあるが、地山削り出しの階段状を呈している。墓道下部は自然崩落している。石室東袖石裏側の墳丘を削りだした底に、須恵器壺類等がまとめて出土した（土器群1）。

土器群1（図11）

東側袖石裏側の墳丘を垂直近くに削りだした部分で検出した。欠損のない完形品はないが、壺蓋・壺身と小型平瓶各1点が若干欠損のある略完形品で、時期的にも同一時期のものと思われることから、もともとここに埋置したものと思われるが、小型平瓶が倒れていることや壺身の天地が逆転していることなどから完全に本来の位置は保っていない。土器の破片が多いことや、ガラス玉1点が含まれることから、あるいは中世などの時期に、石室遺物を撒き出してまとめてここに置いた可能性も排除できない。ただし、その場合はわざわざほぼ垂直に墳丘を削った理由がわからない。

（6）石蓋上墳墓SX107（図12）

墓道1の平坦面の西側壁に沿って検出した。掘方の両端に樹根があり、搅乱を受けた蓋石の外まで掘方が出ているが、形状はしっかりとおり、本来からこの形状であった可能性もある。蓋石は花崗岩製の扁平な13石からなる。通常の石蓋土墳墓のように、すべての石蓋が掘方の両壁にのっているわけではなく、壁まで届いていない石もある。にも関わらず石の下の面に乱れがないことから、木蓋の上に石が乗っていたとは考えがたい。従って前記の掘方両端を木棺の小口としても、通常の組合せ式木棺は想定しにくい。以上より、土塚を埋め戻した後に石蓋を置いたものと考えられ、北端の石が立っていること、かつ南端は石が三重に置かれていることなどから考えれば、蓋というより標石的なものかもしれない。現況の掘方の長さ1.26m、幅0.24m、床面から蓋石までの高さ14cm前後を測る。出土遺物はない。

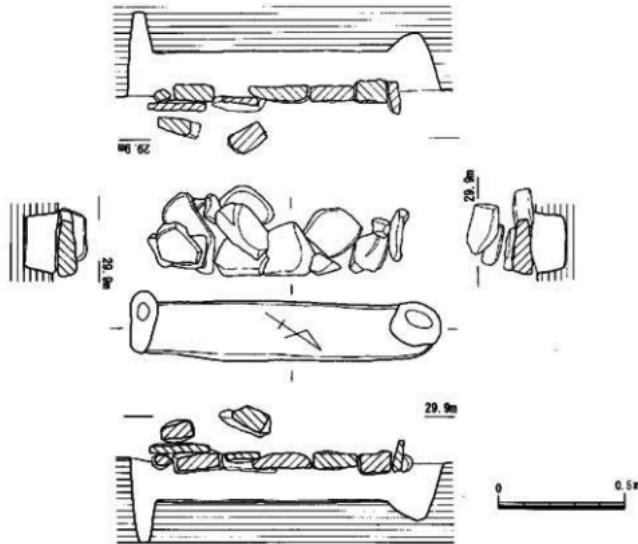


図12 石蓋土墳墓 (1/20)

(7) 出土遺物

山上遺物は墳丘・石室からは極めて少なく、墓道から出土したものが圧倒的に多い。以下、遺構毎に記述するが、鉄滓のみ最後にまとめて記載した。

① 墳丘出土遺物(図13-1・2・9・14)

墳丘からの出土遺物は少なく、かつ古墳と関係ない遺物も含まれている。古墳時代の遺物は須恵器の破片が数点出土したのみである。1は断面がく字状を呈する縄文時代晚期の浅鉢である。復元口径20.8cmを測る。両面とも丁寧なナデ調整で仕上げている。にぶい黄色から褐色を呈する。2は白磁の完形品である。北西側周溝部分の墳丘流土内上部から出土した。口縁部付近はやや歪み、口径17.5~17.8cm、器高6.7~7.4cmを測る。二次焼成を受け、釉はすべてとんでいる。本来は中世の木棺墓等に伴っていたものが、流れてしまったものか。9は墳丘表土剥ぎ中の廃土から出土したもので、墳丘もしくはそのごく近い地点の表土もしくは盛土最上部から出土したと考えられる。材質は不明であるが、凝灰岩に似る。下半部は直方体で、上半部は断面台形を呈する。中央に上下に穿孔し、孔は途中から下広りである。全面丁寧に研磨している。下部の一辺5.6cm、全体の高さ2cmを測る。時期・用途とともに不明。14は安山岩製の石鎌で、現存長2.7cm、現存幅1.6cm、厚さ0.4cmを測る。

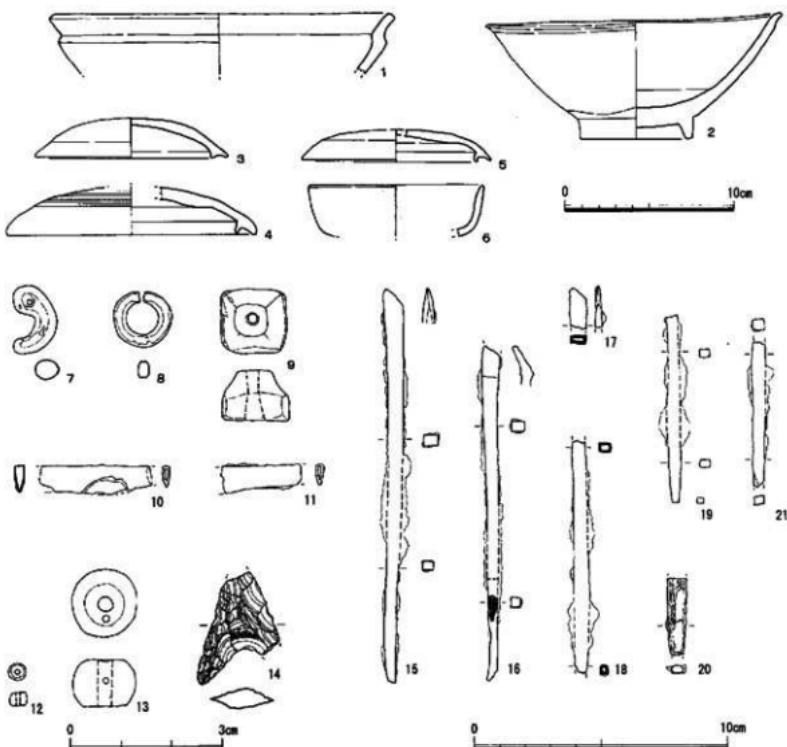


図13 出土遺物1(墳丘・石室)(1/1, 1/2, 1/3)

② 石室・閉塞石出土遺物（図13-3～6、7・8、10～13、15～21）

3～6は須恵器である。3～5は返りを持った坏蓋で、いずれも約半分の遺存である。3は復元口径11.4cm、器高3.4cmを測る。灰白色を呈し、焼成が悪い。玄室埋土出土。4は復元口径14.7cmを測る。4の天井部には一見カキ目状のヘラケズリを施している。玄室埋土と墓道3土器群1の接合資料である。5は復元口径11.2cm、器高2.9cmを測る。閉塞石中と墓道部床面上の接合資料である。6は蓋か身か悩んだが、身として掲載した。復元口径10.3cmを測る。全面ヨコナデで仕上げている。玄室埋土の出土。

7はガラス製勾玉で、長さ2.7cm、幅0.9cm、厚さ0.8cmを測る。淡い緑色を呈する。仕切石から約30cmの地点の墓道部中央やや西よりの床面上から出土した。青色を呈する。12は石室床面近くの埋土出土の粟玉。径0.38cm、厚さ0.28cmを測る。淡い緑色を呈する。玄室・墓道部の土は籠にかけたが、これ以上の玉類は出土しなかった。13はガラス製丸玉で、閉塞石中の出土。径1.35cm、厚さ0.95cmを測る。8は墓道部床面よりやや上の黒色出土の青銅製耳環で、両面に鍍金が残るが、両側面は全面欠落している。径2.15～2.3cm、幅0.7cm、厚さ0.45cmを測る。

鉄製品は、玄室埋土から墓道部にかけて鉄鎌と刀子片とともに玄室埋土中の出土。10は身から茎の破片で幅1cm、厚さ0.4cmを測る。11は茎の破片で、幅0.8cm、厚さ0.35cmを測る。15～21は鉄鎌で、15は唯一の完形品。長さ15.7cmを測る。身・茎とともに断面形は長方形で身幅0.6cm、厚さ0.5cm、茎幅0.45cm、厚さ0.35cmを測る。16は先端部を欠失し、現存長13.3cm、身幅0.55cm、厚さ0.4cm、茎幅0.4cm、厚さ0.35cmを測る。17・18は同一個体と思われ、茎先端部と身の途中を欠失する。20には木質が残存し、茎の断面は梢円形を呈する。

③ 墓道1、土器群A出土遺物（図14）

閉塞石南側の墓道で出土した一群である。22・23は墓道上部、24は腐植土層の下（最下層）で床面より上から、他は腐植土層の最下部から出土した。22・23は須恵器坏蓋。22は宝珠つまみを持つ。23は返りを有し、復元口径14cmを測る。24は坏身と思われ、復元口径14cmを測る。25は須恵器坏身の底部の破片。26と27は須恵器の壺。26は口縁部外面に「××△」のヘラ記号を有する。口径23.4cmを測る。頸部下の外面はカキ目を施している。27は胴部中央に蜘蛛の巣状の浅い沈線を施している。口径21.3cm、器高45cmを測る。体部外面は木目直行の平行叩きの後カキ目、内面は上部が青海波、下部が同心円の当て具である。沈線による文様は、不足部分があるため全形は不明であるが、現状は横線4本、縦線6本からなり、沈線は1mm以下の細い施文具によって施されている。28は石製の勾玉である。全体の長さ5.6cm、身幅1.3～2.1cm、厚さ0.9～1.4cmを測る。尾の部分は一段小さく造り、差込み状になっている。背中には長さ4.3cm、幅4mm、深さ3.5mmの抉りが施されている。滑石系の石材である。

④ 墓道1平坦面（SX105）出土遺物（図15～29～38）

29・30は平坦面北東側の崖線近くで出土した土器群2の名称を付けた一群である。29は土師器の小型壺で、底部近くを欠失する。口径11.2cm、推定器高10.1cmを測る。外面と内面上半部はヘラ状施文具によるミガキに近いナデである。赤色に近い色調を呈する。30は土師器の小型の壺で底部近くを欠失する。全体壺んでおり、口径11.3～12.6cm、推定器高13cmを測る。31はSX105埋土上部から出土した坏身である。口径11.1cm、器高4.3cmを測る。32以降は埋土下部の出土。35は坏蓋で、口径13.9cm、器高4cmを測る。外面は全面ヘラケズリの線が明瞭に残る。口縁部は直立気味である。38は坏身で、口径11.5cm、器高4.3cmを測る。体部下部はヘラケズリ、上部はヨコナデである。32・33は壺で、ともに口径が体部最大径より大きく、頸部が長いと考えられる。32は口径11cmを測る。33は口径11.7cm、器高13.4cmを測る。孔の上半部分に斜め方向に押しかてた綱目が全周している。36は高坏である。口径

12.3cmを測り、全面ヨコナデで仕上げている。37は土師器の壺で、口径13.9cmを測る。頭部外面はゆるやかにカーブする。全面摩滅がひどく、胴部内面のナデ調整と口縁部内面に横方向のハケメが確認できるが、外面は摩滅のため不明。ナデ調整の可能性が高い。

⑤ 墓道1、SX106出土遺物

土師器の壺が出土したが、復元できなかった。

⑥ 墓道1 石製階段 (SX103) 出土遺物 (図15-39)

階段の埋土中上部からの出土。39は須恵器坏身で、1/3の遺存。ただしこの土器は古墳下表採品と接合している。注記に誤りがある可能性も考えたが、階段遺物は上部からの転落品で、破片の一部が谷底まで落下して流されたものと思われる。復元口径10cm、器高3.5cmを測り、口径・器高ともに31・38より小さい。口縁部はやや長めである。他に土師器壺の破片が多く含まれる。

⑦ 墓道1、SX102出土遺物 (図15-40~44)

階段の下の北側から出土した一群。略完形の須恵器壺以外はいずれも破片である。41は須恵器の坏身片。復元口径9cmを測る。40は長頸壺もしくは平瓶の口縁部。復元口径6.7cmを測る。42は土師器の把手。上面に長さ1cm、上端幅3mm、深さ1.5cmの線状の抉り込みがある。43は土師器の壺で、復元口径29.8cmを測る。外面はナデ、胴部内面はハケメである。44は須恵器の壺で略完形品。口縁部外面に「W」のヘラ記号がある。胴部外面は平行叩きの後カキ目、内面は上部が平行叩きで、下部が同心円の当て具である。口径22.7cm、推定器高46.3cmを測る。

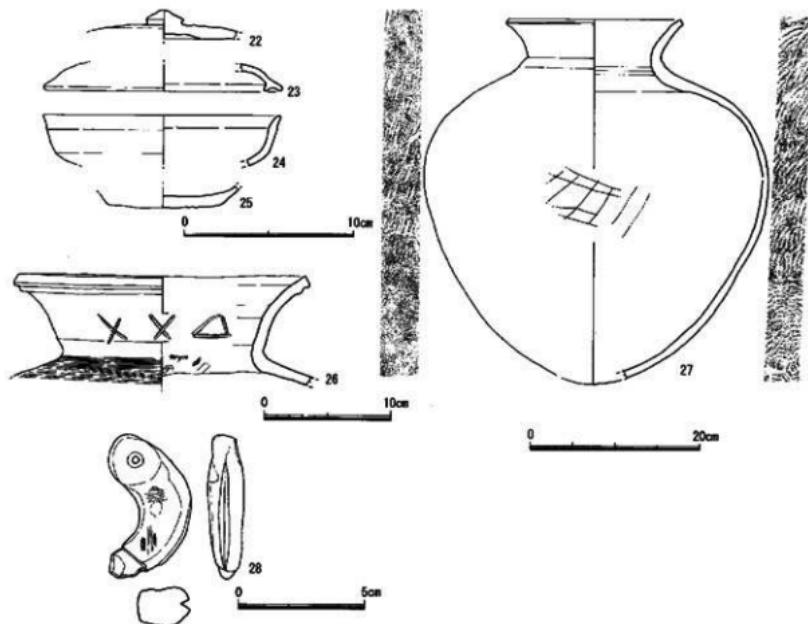


図14 出土遺物2(墓道1十器群A)(1/2, 1/3, 1/4, 1/6)

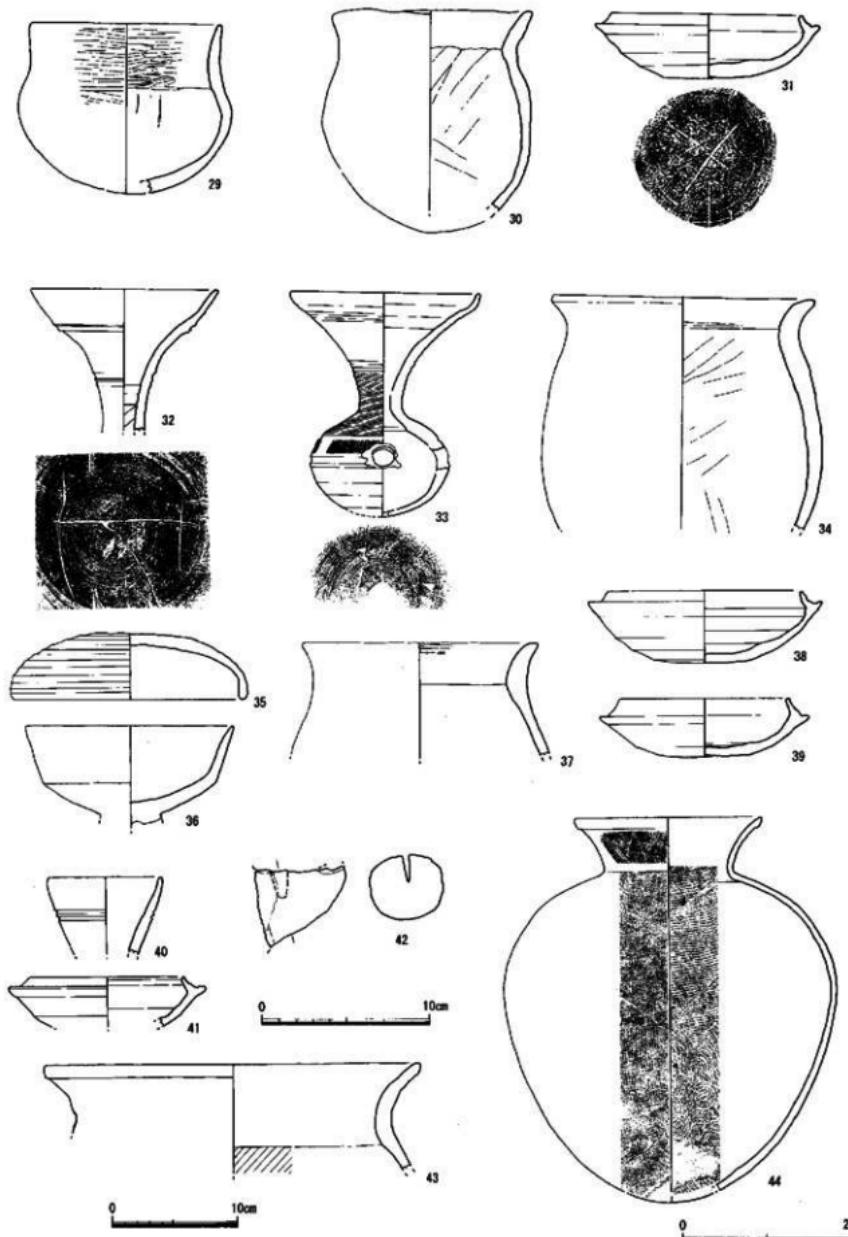


図15 出土遺物3(墓道1その他)(1/3, 1/4, 1/6)

⑧ 墓道3、土器群I出土土器 (図16-45~56)

墓道3の上部、石室東側袖石の裏側でまとまって出土した一群である。45~47は須恵器壺蓋。45はつまみを持たない。口縁部には鈍い返りを持つ。復元口径11.2cm、器高3.4cmを測る。46は宝珠形つまみと返りをもつ。復元口径15.1cm、器高3.2cmを測る。47は復元口径14.8cm、器高3.4cmを測る。口縁部は返りではなく、高台状である。48と49は須恵器高台壺の身である。49は体部はほぼ直線的に外傾しているが、48は途中で稜がついて屈曲している。高台も49は低くて断面台形であるが、48は高くて端部が外にはねている。48の外底部に×印のヘラ記号がある。52は小型の平瓶である。器高6.4cm、体部の最大径9.2cmを測る。体部外面はカキ目、下部は横ナデ及びナデ、内面は下部は回転ヘラケズリで上部はナデである。50は須恵器高台付き鉢または壺の下半部か。内面は横方向のヘラケズリの線が明瞭に残る。復元高台径10.2cmを測る。51は土師器高台付き壺とも呼べるもので、復元口径20.2cmの大きな深めの皿状を呈する。器高5cmを測る。調整はほぼ全面ナデである。53は須恵器壺の底部で、底径10.4cmを測る。底よりやや上部はカキ目で仕上げている。54と55は長頸壺の体部屈曲部の破片である。55は最大径18.6cmを測る。56はガラス製の卡で、平面径約1.23mm、高さ0.99mmを測る。淡い緑色を呈する。孔の上部は使用によると思われる剥離がある。

⑨ 表土出土遺物・表採品 (図16-57~58)

57は表土中の出土。記載がなく出土地點はわからない。須恵器の高壺で、下半にカキ目を施す。復元口径13.4cmを測る。58は表採品で、須恵器の壺身である。返りは短い。復元口径11cmを測る。

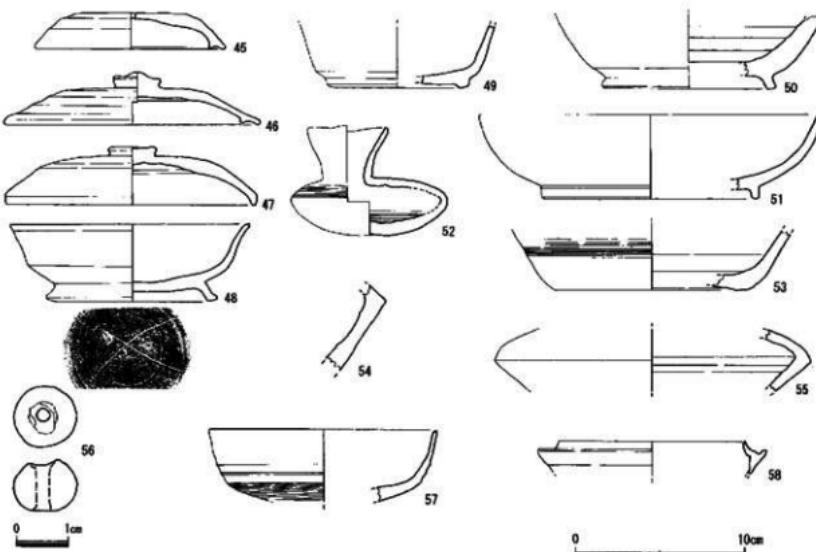


図16 出上遺物4(墓道3)(1/1, 1/3)

⑩ 鉄滓（表1）

鉄滓は羨道部・閉塞石中から閉塞石南側の墓道にかけて出土した。鉄滓はこの他にも西側古墳周溝でも2点出土している。あわせて総数32点、1,778gが出土した。出土状況は散発的な出土ではまとまりがなく、もっと多いのは閉塞石中からの出土で20点、1,050gで次いで閉塞石南側の墓道で7点324g、羨道部は2点で319g、玄室が2点52g、周溝から2点33gが出土した。閉塞石中出土のものは、閉塞石内の各所から散発的に出土したもので、追葬時の閉塞石積み直しに混じり込んだものと思われる。他の古墳例からは閉塞石前面に供獻したものが多く、当古墳も閉塞石南側の墓道山上が閉塞石中山上について多い。従って鉄滓の供獻は古墳築造後、閉塞石がある状態の比較的早い段階であったと考えられる。出土した種類は炉壁1点、161g、炉底塊18点、1,361g、炉内滓13点、256gである。すべて製鐵時のもので、鍛冶滓はない。他の古墳と同様に炉底塊・炉内滓が多い。

表1 出土鉄滓一覧表

No.	出土位置	種類	大きさ	メタル鑑定	重さ	備考	No.	出土位置	種類	大きさ	メタル鑑定	重さ	備考
30	II区焼窯	炉内滓	3.2×3.0×2.0	なし	2	20	15	閉塞石中	炉内滓	3.8×2.8×1.2	なし	3	15
31	IV区焼窯	炉内滓	2.5×1.6×1.0	なし	3	13	16	閉塞石中	炉底塊	5.0×4.5×3.2	なし	4	90
5	羨道部	炉底塊	5.5×2.5×3.0	なし	3	94	17	閉塞石中	炉底塊	3.4×1.5×1.0	なし	3	17
6	羨道部	炉底塊	8.8×6.0×4.6	なし	3	225	18	閉塞石中	炉底塊	2.7×2.2×1.0	なし	4	18
25	玄室埋土	炉底塊	5.0×4.0×1.6	なし	3	36	19	閉塞石中	炉底塊	3.0×1.8×1.0	なし	2	14
26	玄室埋土	炉内滓	3.8×2.5×1.6	II	4	17	20	閉塞石中	炉底塊	2.7×2.4×1.0	なし	4	20
1	閉塞石中	炉底塊	4.7×3.7×3.5	なし	4	54	21	閉塞石中	炉底塊	2.7×2.6×1.4	H	5	14
2	閉塞石中	炉底塊	8.0×3.5×3.2	II	4	85	22	閉塞石中	鐵器?	3.2×1.8×1.0	H	5	7 鐵器?
3	閉塞石中	炉底塊	5.0×4.0×4.0	II	5	124	23	閉塞石中	炉内滓	2.8×2.3×1.0	なし	3	9
4	閉塞石中	炉底塊	6.5×4.0×3.2	なし	2	144	27	閉塞石中	炉内滓	3.0×2.5×1.0	なし	3	29
8	閉塞石中	炉底塊	8.1×3.0×4.0	なし	3	168	28	閉塞石中	炉内滓	2.6×2.3×1.0	なし	2	10
9	閉塞石中	炉底塊	4.6×3.0×2.6	なし	4	56	29	閉塞石中	炉内滓	3.0×2.0×2.0	なし	3	10
10	閉塞石中	炉底塊	4.8×3.5×2.8	なし	4	66	33	閉塞石中	炉底塊	3.3×4.2×3.0	なし	3	78
11	閉塞石中	炉内滓	4.9×2.5×2.0	なし	4	42 水化物付着	24	上層A	炉内滓	4.3×2.5×2.0	H	5	23
12	閉塞石中	炉底塊	3.5×2.5×2.0	なし	4	39	7	塞道(閉塞石中)	炉壁	8.2×6.4×1.5	なし	1	181
13	閉塞石中	炉底塊	4.2×3.1×1.7	なし	3	38	32	古墳古物(墓室)	炉内滓	3.2×1.6×1.0	なし	3	11
14	閉塞石中	炉内滓	14.0×15.0×2.0	II	6	37							

4 まとめ

本墳の最大の特徴は、長い墓道とそれに伴う平坦面及び石製階段の存在である。これらを含めて、項目ごとに簡単にまとめる。

(1) 各造構の出土須恵器の時期

図17は当墳出土主要須恵器である。概ね九州編年のIVa期～VI期の各時期のものが出土している。各造構別にその時期を見てみる。

- 石室・閉塞 壺類はいずれも破片で、蓋はすべて返りを持ち、V～VI期。
- 墓道1土器群A 壺はV期。完形の壺もV期以降。
- S X102 IV期の壺身片が出土している。壺はIV期か。
- S X103 階段壺十中出土の壺身があるが、出土状況から上方(つまりS X106)からの転落品と思われる。IV期に属する。
- S X105 壺はIV期の壺蓋・身が出土している。高壺も脚が長くIV期であろう。壺も体部が丸く、頭も長いことからほぼ同時期と考えられる。
- 墓道3 完形の壺蓋・身はVI期である。

もっとも古い時期であるIV期の須恵器の完形品は、墓道1の平坦面及び階段周辺に限られている。IV期の須恵器蓋坏をさらに細かく見ると、口径・高さから2つのグループに分けられる。Aグループは口径11.1~11.7cm、Bグループはそれより小さく9~10cmのものである。IV期の須恵器については現在V期との併行するなどの時期的問題点が浮上しているが、IV期だけを取り上げると、おおむねAグループがBグループより古いと考えられよう。IV期の遺物は少ないため、詳細な分類はできないものの、従来の編年観から言えば、AグループがIVa期、BグループがIVb期と言えるだろう。

(2) 石室形態から見た古墳の築造時期

玄室の長幅比は概ね1.02:1~1.1:1で、ほぼ方形プランといえる。以下、特徴を列記する。

- ①玄室の築造方法を見ると、奥壁腰石は大きな1枚の石を用いている。左側石の腰石も比較的大きく、両壁とも2段目以上の石もやや大振りの石を用いている。
- ②奥壁両隅は腰石上部横から力石を配し、また持ち送りは少なく、比較的垂直に近く立つ。
- ③天井高は約2mと低い。
- ④全般的に石の積み方は雑ではない。
- ⑤羨道部は玄室の長さの1.4倍で、羨道部幅は比較的広い。
- ⑥天井石は玄室から羨道部にかけては徐々に高さを下げるものの、段は付かない。

玄室が天井の低い小形の方形プランであることから、概ね須恵器九州編年IV期以降である。当墳と同様の石室プランをもつ古墳は、福岡市西区羽根戸南古墳群E-2号墳、福岡市西区金武古墳群吉武E-3号墳、前原市坂の下2号墳などがある。使用石材の大きさや腰石を上とする積み方はそれぞれ異なるものの、いずれもV期の須恵器が出土しており、従来の石室の編年観とも矛盾しない。以上の点を考え合わせると、石室プランの類例からはいわゆる終末期のものと思われ、九州須恵器編年のV期を前後する時期に位置づけが可能である。ただし終末期の小型石室の割には比較的積み方が丁寧であることと、他の類似古墳より腰石が大きくしっかりとしていることに特徴がある。

(3) 墓道と石室から見た造営時期と追葬時期

墓道は3本検出した。このうち墓道2は当古墳の西側にある古墳のものと考えられ、当古墳につながる墓道は墓道1及び墓道3の2本である。墓道1は前述のように築造当初に掘られたものである。

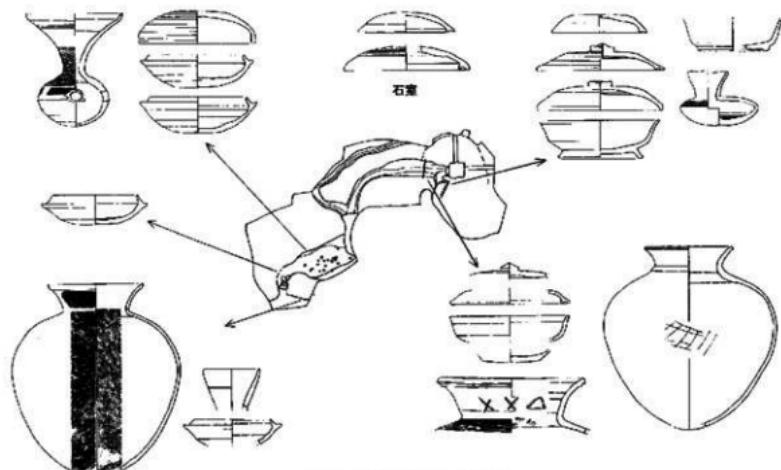


図17 遺構別山上須恵器

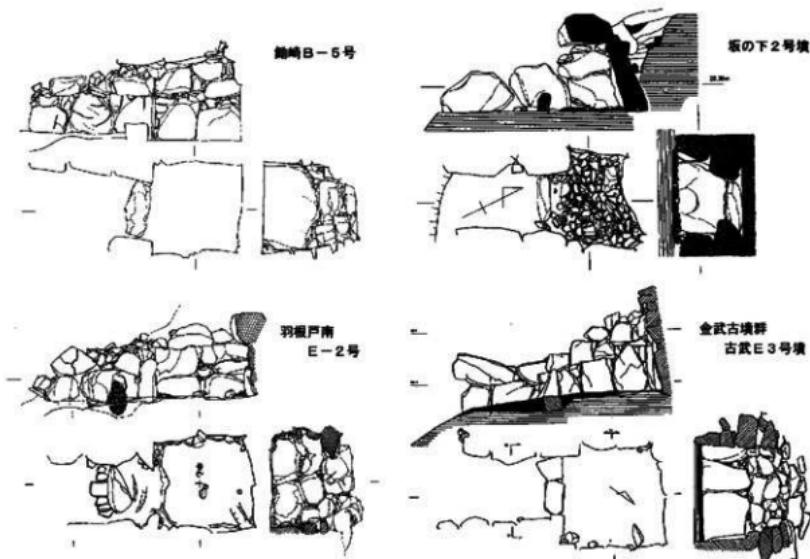


図18 鍋崎B-5号墳類似石室

その全形は、本文中に述べたように階段やピット群のある平坦面を有する極めて特異なものである。前述のとおり、IVa期の須恵器は墓道の平坦面及び階段付近から出土している。一方、石室の形態からは、V期前後の最も新しい段階であると考えられる。つまり墓道出土遺物の時期と石室形態から考えられる時期が合致しない。石室及び石室に近い場所である土器群Aからは下層も含めてIV期の須恵器が出土していないことから考えれば、墓道が蛇行していることがや引っかかるが、平坦面及び階段はむしろ墓道2につながるものではないか。墓道1と当古墳はその後の築造で、平坦面から続けて掘削したと考えられる。この推測が正しければ、当古墳の上にIVa期の古墳が存在すると思われる。

墓道3は狭道部東壁があった部分から下へ降りているが、積極的証拠はないものの、狭道部東壁が自然崩壊した後に墓道3が作られたのではないだろうか。閉塞石はこの時に明らかに積まれていている。その時期は土器群2の完形品数点の時期であるVI期である。墓道1はその前の時期まで使われたと考えられ、石室や土器群Aから出土した土器から考えれば、古墳の造営はV期中と考えるのが至当で、閉塞石を少なくとも1回は積み直していることから、墓道1を使った追葬が1回は行われている。

以上から、IV期・V期の須恵器の編年（共伴関係）に関わらず、墓道1平坦面・階段でIV期遺物が出土し、石室内外及び墓道土器群AでIV期の遺物が出土していないことからも、当石室はV期の築造と考えられる。

(4) A群との対比

A群では石室構築年代として、IVb期までの古墳が発見され、追葬はV期まで行われている。当古墳はA群築造後に作られたもので、当古墳の墓道が谷沿いにA群へ向かう可能性が高いことを考えれば、別の尾根に作られた古墳とはいえ、一連の古墳群と言えるかもしれない。しかしA群の最も新しいA-1号墳は当古墳に比較的近い時期にもかかわらず、長方形プランの石室形態や構築法は大きく異なる。A-1号墳は大形の石材を使った盟主的な古墳であるための相違であることが考えられるが、その直前のA-5号・9号墳も狹長な長方形プランであり、A群は長方形プランの一連の流れの中で変化している。このように考えると、近くにあり墓道が同じ方向に向かうとしても、異なる系列を考えるのが自然であろう。

図版1



古墳周辺現況（東から）



古墳現況（東から）



墳丘西側土層断面1



墳丘西側土層断面2



墳丘遺存面全景（南東から）



墳丘遺存面近景（南から）



北西侧周溝と墳丘遺存面（北東から）



現況及び墳丘

地山整形全景（北から）



玄室全景



玄室西（左）壁と奥壁



玄室西（左壁）入口側下部



玄室西（左壁）入口側上部



玄室東（右）壁入口側



仕切石



横穴式石室
羨道部西（左）壁

— 21 —

図版3



墓道部・玄門部全景



閉塞石（南から）



墓道部鉄器出土状況



墓道部ガラス勾玉出土状況



墓道1 土器群A部分土層断面



墓道1 平坦面 (S X 105) 土層断面



墓道1 石製階段 (S X 103) (南から)

横穴式石室入口及び墓道1



墓道1 石製階段 (S X 103) (東から)



墓道 1 階段 (SX103) と SX106・102



墓道 1 土器群 2



墓道 1 土器群 A 石製勾玉



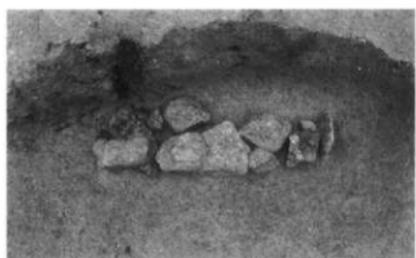
墓道 1 土器群 A



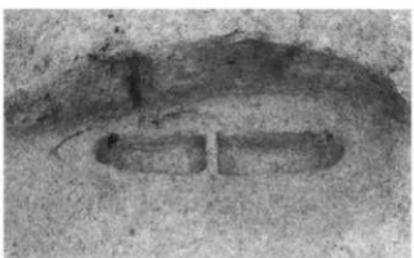
墓道 3



墓道 3 土器群 1



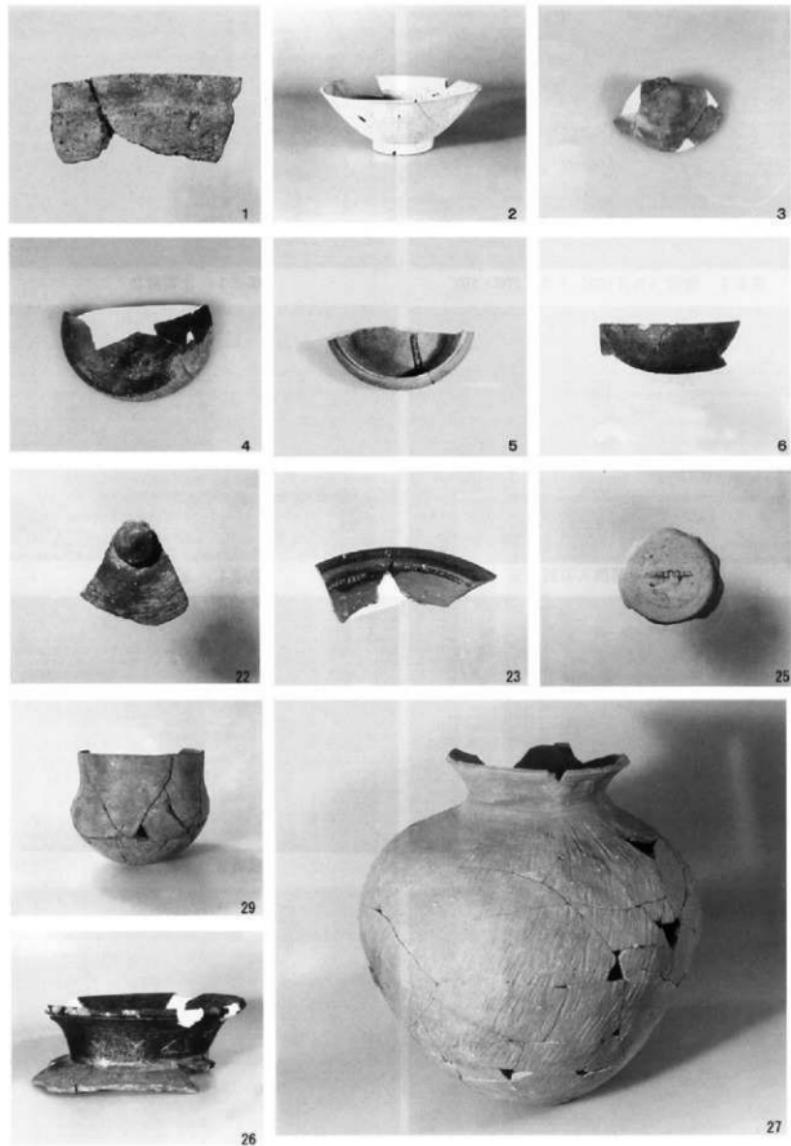
石蓋土壙墓蓋石



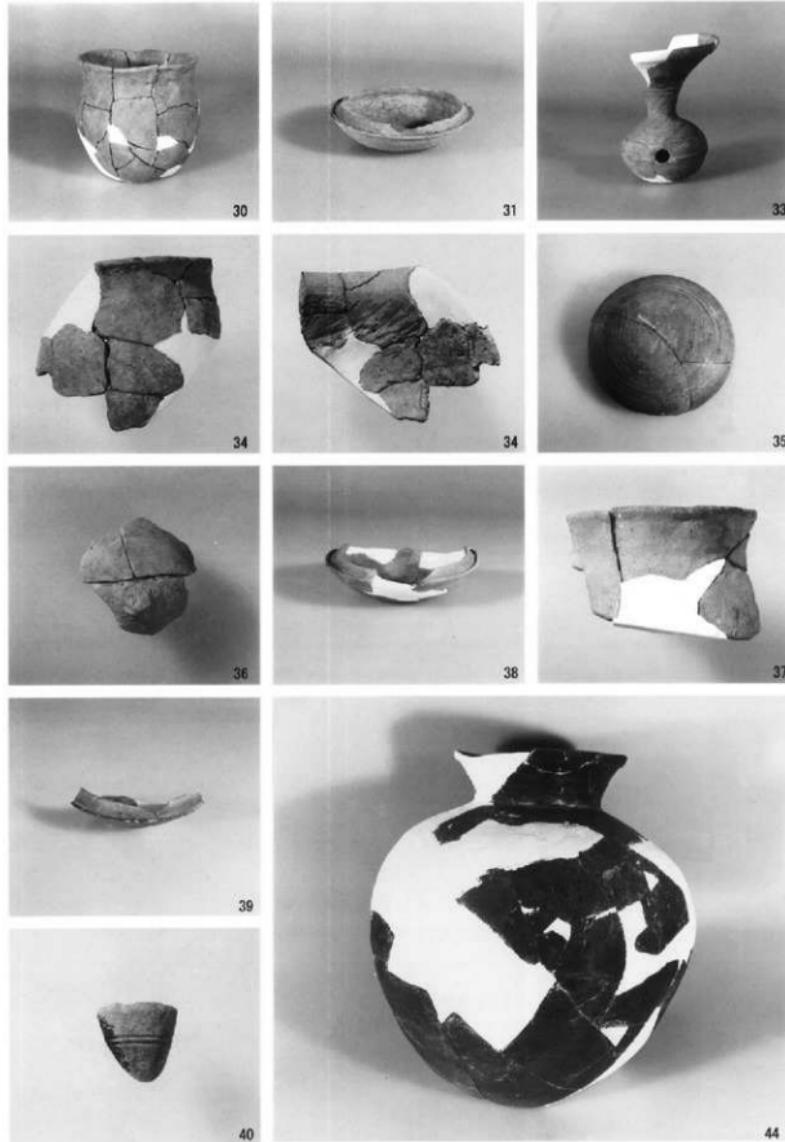
石蓋土壙墓掘方

墓道 1・3 及び石蓋土壙墓

図版 5



出土遺物 1



出土遺物 2

図版 7



42



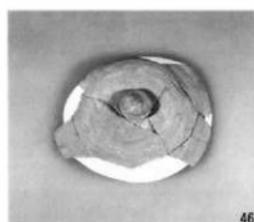
41



43



45



46



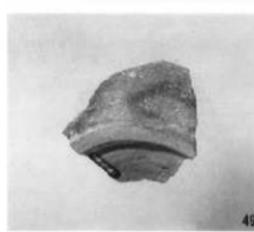
47



48



48



49



50



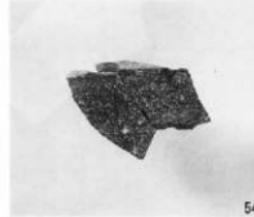
52



51



53



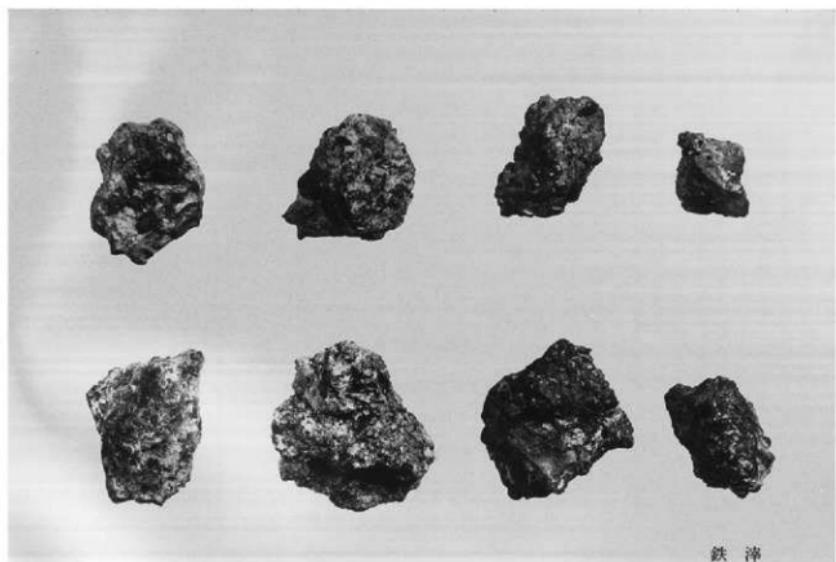
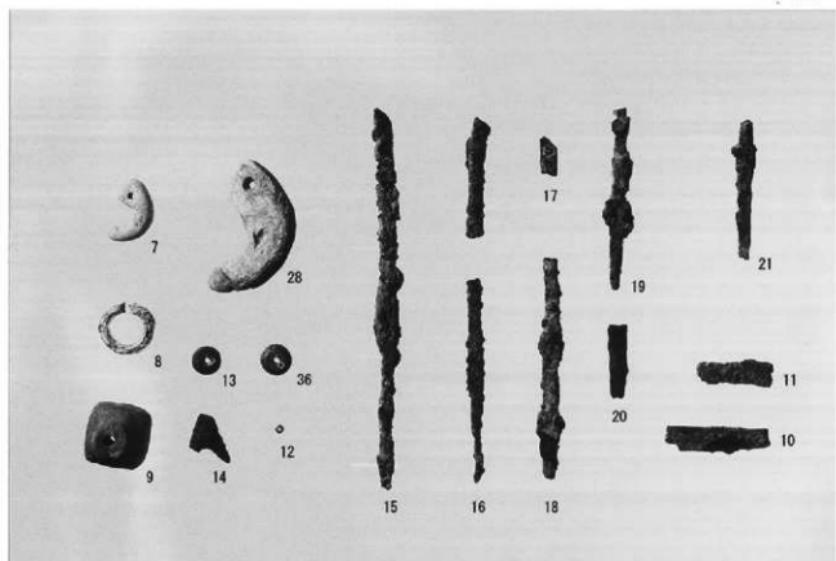
54



55

出土遺物 3

図版 8



鉄 淬

出土遺物 4

鋤崎古墳群 3

福岡市埋蔵文化財調査報告書第697集

2001年12月27日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 有限会社 あさひ印刷所